



Q15

インシデントプロセス法による 児童生徒理解とは？

まずは
ここから



- この子のよさを大切にして実態を把握します。
- よさを活用した支援の在り方を関係教職員で話し合います。

だれもが参加できる方法（インシデントプロセス法による情報収集やグループ討議）でケース会議を行うことで、教職員の意識も変わり、有効な支援の方向が見えてくることがあります。

ここでは、小学校よりタロウさん（小4・ADHD）の教育相談の依頼を受けた養護学校の教育相談担当教員が行った「特別な教育的支援を必要とする子どもへの支援」の研修会を紹介します。

インシデントプロセス法とは：事例検討法の一つ。事実の発見とその対応の工夫に重点をおいた「問題解決型」の検討法です。

「個別の指導計画」についての説明を聴く

小・中学校においては、「個別の指導計画」について知っている教員は、まだそれほど多くありません。そこで、まず初めに「個別の指導計画」とはどんなものか、なぜ必要かといったことを、資料を使って説明することにしました。

「自律教育シリーズ第1集 自律教育校内支援体制の手引 みんなで支援 みんなで笑顔」 P24～P29



〈参考資料〉

「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」（文部科学省）

学級担任より「タロウさんの実態の資料」の提示を受ける

学級担任には、事前に、「タロウさんの実態の資料」を用意してもらうようお願いしておきました。実態資料には、「生育歴・家庭環境」「保護者の願い」「諸検査の結果・医学的所見」「日常生活の姿」と「担任が今困っていること」を記入してもらうようにしました。

【ここがポイント】

- 資料提出にあたっては、担当者に過度の負担がかからないようにします。A4版1枚程度で十分です。
- みんなでタロウさんの支援について考えるため、資料には、担任が考えた「総合考察」や「支援の方向」を記入しないようにします。
- 実態にはその子のプラス面を大事にして記入します。とかくマイナス面が目につきやすいものですが、それでは、支援の方向を考えることができないからです。



学級担任が提示した「タロウさんの実態」 (一部抜粋)

生育歴・家庭環境

- 父, 母, 兄, 姉, 本人の5人家族。(以下, 略)
- 1歳くらいの頃, 1年近く忙しかったためテレビを見せて寝かしておいた時期があった。(以下略)

保護者の意向

- 原学級でやれる活動にはきちんと参加して, 情緒障害自律学級で国語や算数の力をつけてほしい。
- 落ち着いて生活してほしい。

諸検査の結果・医学的所見

- ADHD, リタリン服薬中
- WISC-III 略

日常生活の姿

〈教科〉

- 平仮名を覚え, カルタが楽しめている。平仮名の読み書きがたどたどしい。
- 39くらいまでは正確に数えられる。指で確認しながら加法や減法を考えるようになってきた。

〈行動〉

- 昆虫が好きで, 虫の図鑑を好んで見たりカブトムシやクワガタで遊んだりしている。
- 戦士のゲームや空想が好きで玩具の武器を持ち歩きたがったり, 段ボールで刀を作りたがったりする。
- カルタやウノなどのカードゲームや新聞紙ホッケーのような遊びをする。負けず嫌いで勝敗にこだわり, 負けそうになると… (以下略)

〈コミュニケーション〉

- 遊びのルールや判定など些細なことからけんかになり, 注意を受け入れることができにくくなる。
- 物おじせずに話し掛けていく。特に大人との関係はよい。

〈対人関係〉 以下略

困っていること

- タロウさんが興奮してきたときにどのように対処していけばよいか。
- どのような学習場面の提示をしていけば, タロウさんも課題ののってきて, 効果的な学習となるか。

資料から, 一人一人が支援を考える

資料を基に, 一人一人がタロウさんの実態についての考察や支援の方向, 具体的な支援を考え, ワークシート (下表) に記入するようにしました。

担任が困っていること

- タロウさんが興奮してきたら…
- どのような学習場面の提示を…

総合的な考察

支援の方向

【ここがポイント】

「自分がタロウさんの担任だったら」という立場で, 支援案を考えるように問い掛けます。

- 完璧な案を考えようとせず, 些細なことでもよいので, 思い付くところを気軽に書いていきます。
- 教育相談で観察したタロウさんの姿を伝え, 支援を考える上での参考にしてもらいます。



考えた支援について、グループで発表し合う

- (1) 4～5人のグループでの自分の考えた案の発表。
- (2) 各自の案について、情報交換。
- (3) 代表者による意見のとりまとめ。

【ここがポイント】

各先生が、なぜその支援を考えたかを知り合う情報交換の場をもつことが大切です。

タロウさんの支援について、各グループから発表をする

- (1) 代表者による各グループの案の発表。
- (2) 教育相談担当教員による黒板へのまとめ、整理。



グループから出されたタロウさんの支援の一例

総合的な考察

- (アオキ先生) 自然への興味が強い。彼の好きな虫に関することを徹底的にやってみたらどうか。絵を描く、粘土、写真、食べ物の実験など、その中で彼のひっかかってくるものがあつたら、そこをきっかけに次の方策を考えていく。
- (イケダ先生) 我慢のできない(勝負へのこだわり)点も楽しいという目的さえもてば、我慢できるので、「我慢できたね」シールを作る。カブトムシシールがあれば、さらによいのではないか。
- (ウエノ先生) 興味のあることへのこだわりが強いので、興味のあることに結び付けた学習活動であれば取り組みやすいだろう。

支援の方向

- (アオキ先生) 昆虫図鑑を自分で作る(カルタにしてみても)。絵を描いたり、デジカメで撮ったりしたものをはる、名前を書く、長さを測るなどする。
- (エガワ先生) いつでも集団とは考えず、不都合のないときは、一人でやりたいことができる時間を確保することも必要。タロウ君が気持ちのよい場所を設ける。落ち着いたときに指導する。
- (オオノ先生) カルタの選択やカルタ取りのルールは自分で選択できるようにする(「途中で止めたり、邪魔をすると負けだよ」)。納得した上でゲームに取り組めるようにする。
- (タナベ先生) 少し頑張ったら好きなことができるなどの日課の工夫をする。

【ここがポイント】

- 出された支援案について、関係付けを図りながら黒板にまとめます。
- 説明に当たっては、その支援案を考えた背景にあるものを大切にしながら、コメントします。
- 出された支援案について、担任や自律教育コーディネーターの意見や感想を聞く機会を必ず設けます。

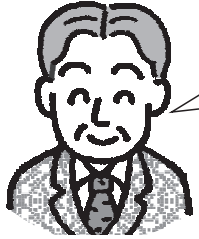


感想や所見を発表する

担任アオキ先生



タロウさんの支援について、こんなにたくさんの先生方に考えてもらえ、しかも、たくさんの支援案が出され、こんなにうれしいことはないです。さっそく、出された支援の幾つかについて試してみようと思っています。



自律教育
コーディネーター

この演習を通して、タロウさんの支援についてみんなで考えることができ、今後、どのように取り組んでいったらよいか方向性が見えてきたように思います。



参加者
カネコ先生

先生方からいろいろな支援が提案され、とても参考になりました。タロウさんのことは、よく知らなかったけど、今後、意識して見ていこうと思っています。



【キーポイント】 通常の学級の教員も、今までに経験した多くの子どもとの接し方の中から、障害のある子どもへの接し方のヒントを見つけ出すことができます。また、一人では気付かなかったことでも、多くの人の意見を聞くことで意外な視点からのアイデアが生まれてくることがあります。これがチーム支援のよさです。専門的知識がないからと消極的にならないことです。

資料 ①

以下のような流れで、研修を実施した学校もあります。

研修の流れ

- ◆ 事例提供者からの説明をする（10分）。
- ◆ 実践事例のよい点を基に方法論の整理をする（講師）。
- ◆ 実践事例のよい点を参考に、さらに具体的な案を検討する。
 - 近くの2・3人でグループをつくる。
 - 赤ペンと黒ペンを用意する。
 - 1グループにつき1枚の考え方シートに、一人一人が思いつくままに書き込む（黒ペン）。
 - 関連や重要項目について囲む（赤ペン）。
 - 事例に関する不明な点は、随時、事例提供者に質問する。
 - グループごとのベスト案を端的にA4版1枚程度に記入する。
 - すべてのグループの案を一覧できるように掲示する。
 - 関連するベスト案については、近くに並び替える。
 - グループごと、端的に発表する。

研修事後

- ベスト案を記録した紙は保存する。
- 小委員会で、ベスト案を参考に、支援方法について検討する。